

がんばろう 日本!

東日本大震災復旧・復興支援関連特集

3月11日、桜前線の北上を待ちわびる関東・東北に未曾有の被害をもたらした東北地方太平洋沖地震。津波、原発事故と被災状況が拡大し、さまざまな悲しいニュースが日本列島を覆いました。わたくしたち職員も職場を通じて、また個人的な休日ボランティアなどいろいろなかたちで支援、応援をしています。今回はその中から厚生労働省の要請に応じ、被災地派遣に参加した2名のレポートと地域ケアプラザのおまつりに東日本大震災被災地応援のテーマを掲げ、救援物資とメッセージを避難所に直接お届けしたニュースをお送りします。

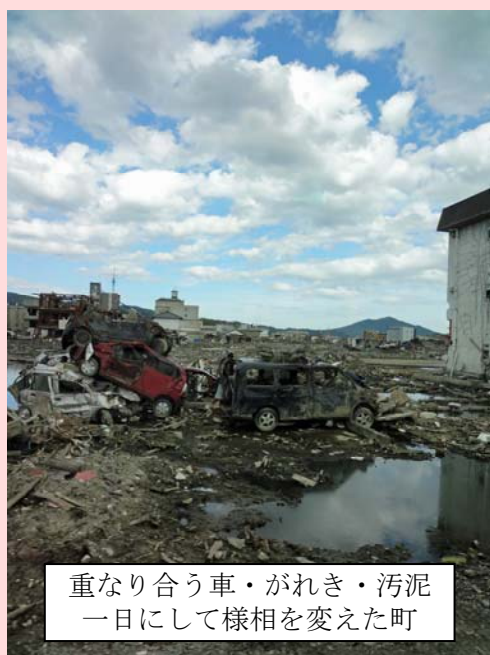


レポート①

避難所となっている
気仙沼市総合体育館
「ケーウェーブ」

浦舟ホーム ユニットリーダー 吉田 ふくみ

私は、6月15日から21日の日程で、東日本大震災の被災地である気仙沼市総合体育館「ケーウェーブ」へ派遣されました。体育館では358名の被災者の方が六つのグループに分かれて生活しています。そのうちのひとつが認知症の要介護の方のグループで、介護職員の支援が求められており、浦舟ホームから2名が参加しました。一般の方には、認知症の方の生活の不自由さを外見から判断することは難しく、介護されるグループだけが轟然とつぶやいていました。私は、派遣職員の代表としてチームをまとめるにあたり、まずは、職員が身だしなみや柔らかい声掛けを心がけることで、一般の方の心をも溶かしていくのではないかと、毎日丁寧なかかわりを重ねてきました。その結果、認知症の方も落ちついて生活ができるようになったことはもちろん、一般の方たちとの摩擦も減少し、常駐の保健師の方からも評価していただきました。要介護者の安全を守り、穏やかな生活を送れるようサポートするには、専門性を極めること、多方面に気を配ること、他職種との連携、そしてコミュニケーション能力がプロとしてとても重要であると改めて感じた1週間でした。



重なり合う車・がれき・汚泥
一日にして様相を変えた町

実際現地に立つと、テレビで見ていたよりも復興への道のりははるか遠くであり、十年、二十年単位の歳月が必要であると感じました。

「支援活動で一番大切なこと」

レポート②

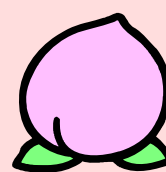
浦舟ホーム 介護職員 金澤 由貴

支援するにあたり特に重要だと感じたのは介護支援チーム内での情報交換の重要性です。同じ介護従事者とはいえ、お互いに全く知らない者同士の集まりだからこそ、被災者の方の様子ちょっとした変化を共有し、思っていること、考えていることを意見交換し合い、リーダー・サブリーダーを中心にチームワークを高めていくことが非常に重要でした。

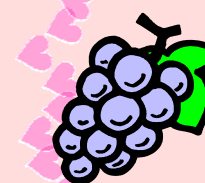
普段の業務でも当然重要なことですが、スタッフ同士の業務の進行状況の把握や、所在確認等を常に行うことが、円滑な活動の大きな鍵であると感じました。

「舞柏ケアプラザまつり」

— 東日本大震災チャリティー 届け！ 応援メッセージ！ —



あづま総合体育館のスタッフの方と鈴木所長



6月12日（日）、横浜市舞岡柏尾地域ケアプラザで行われた「舞柏ケアプラザまつり」には「東日本大震災チャリティー 届け！ 応援メッセージ！」のテーマに賛同いただいた大勢の方々のご来場がありました。

会場にはあらかじめ現地のニーズを確認したうえでご協力を呼び掛けていた救援物資が次々と持ち込まれ、すぐに役立つ日用消耗品が本当にたくさん集まり、当日の義援金も27万円を超えました。

また「福島の皆様へ」と題して、くだもの王国福島を象徴するようなフルーツ型メッセージ用紙にご来場者の「思い」をお寄せいただきました。たわわに実る皆さんからの気持ちは248を数え、「届け！」の文字通り、救援物資ともども、今も600名近い方々が不自由な避難生活を余儀なくされている「福島県営あづま総合体育館」にお届けし、とても喜んでいただきました。物と心が相まって支えあい、少しでも早く被災地の復興につながるよう応援を続けて、長いトンネルの出口を見つける喜びを分かち合いたいと思います。



「善は急げ」そして「善意も急げ」と、お届けしました。

【ホームヘルプサービスをご利用のお客様へ】

サービス提供記録票の様式を改訂するにあたり、お客様控えの要・不要のアンケートをお願いしましたが、これまで通り、お客様宅に控えを置かせていただくこととなりました。新様式のご案内は、追ってお知らせ申し上げます。

事業推進課